

2024年1月21日顕現後第3主日説教

エレミヤ書 3章 21節～4章 2節

コリントの信徒への手紙一 7章 17-23節

マルコによる福音書 1章 14-20節

聖堂の工事もすでに本格的に始まっています。黒い覆いの関係で、聖堂内が少し暗いのですが、復活日までには完了する予定です。

本日の福音書箇所は、イエス様が、ガリラヤのナザレから出て、宣教を開始した個所です。そして、その活動の最初として、4人の弟子を招いた箇所です。ただし、マルコ福音書全体から考えますと、1章14節と15節は、活動の開始なのか、16節からの弟子の召命からが活動なのか意見が分かります。本日は、この1章14節、15節を中心に学びます。

この部分は、「ヨハネが捕らえられた後」という短い表現で始まっていますが、そこにはいろいろな意味が込められています。洗礼者ヨハネに関する「**捕らわれた**」という表現に注目しますと（この言葉は、直訳すれば「引き渡された」ですが）、物語の中でイエス様が「裏切られた、引き渡された」と訳されている個所と同じ言葉です。次に「**後**」と、イエス様の活動が、洗礼者ヨハネの活動と時間的に明確に区分されていることです。イエス様の活動開始は、イエス様に洗礼を授けたヨハネが捕らえられた後であったということです。

この二つのことは、マルコ福音書が最初に書かれた福音書であるという前提に立つならば、深い意味を持ちます。読者にとって、イエス様が十字架にかかり死に、しかし、復活したことを知っていたとしても、その活動全体をまとめて知るのには、この福音書を読む時が初めてです。それゆえ、イエス様の活動の始まりは、洗礼者ヨハネが捕らえられた後であることを、この時知るということです。それは、単に歴史的事実を示しているというよりも、洗礼者ヨハネとイエス様との活動、そしてその死の意味の違いをあらためて示します。洗礼者ヨハネは復活しなかったからです。イエス様が復活されたから、この部分を今読んでいますからです。

イエス様のことを何も知らないで福音書を読み始める人は、初代の教会にはまずいなかったと思いますが、もし、イエス様について何も知らない人がいたとするならば、「ヨハネが捕らえられた後」という表現は別な意味を持ちます。これから描かれるイエス様について、次々に「捕らえられた」という描写で出てくることによって（原語は同じ言葉ですが日本語聖書では訳語が異なるのでその可能性は低くなってしまっているのですが）、活動を開始されたイエス様の結末も洗礼者ヨハネと同じように同じ「引き渡される」こと、「死ぬこと」であろうと、予期させる最初の地点であるということです。

活動を始めたイエス様の様子を、物語は「**神の福音を宣べ伝えて**」と表現します。「神の福音」という表現は、少しくどいように思えます。しかし、あえて「神の」としているのは、「福音」という言葉が、本来は、単純に「良い知らせ、良いニュース」を意味する一般名詞であるからです。

イエス様が宣べ伝え始めたのは、単なる「良い知らせ、良いニュース」ではありません。それゆえに、「神の」という表現を加えているのでしょう。ただし、「神」という言葉も普通名詞です。地中海世界には、たくさんの「神々」いるからです。マルコ福音書の1章1節の「神の子」という文言があるのがオリジナルか否かで少し判断が変わりますが(あると仮定すれば、この個所で「神」が出てくるは二回目でその意味では既知の事柄、ないとなればここが最初)、最初の読者たちは、『聖書(旧約)』を読み、イエス様を信じて教会に集まる方々であったと思いますので、どの神様か?という誤解はなかったと思います。それであっても、「神の福音」、神様から来る良いニュースとは、いったい何だろうと想像を膨らませた、あるいは、今自分が信じているイエス様とは、そのような「良いニュース」にかかわる事柄だったと改めて確認することになったのでしょう。

さて、イエス様が宣べ伝えた最初の言葉は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」(マルコ1:15)です。この中にあつた満ちた「時」という言葉は、瞬間的な「時」を意味する言葉です。流れる継続的な「時」ではありません。先の述べた、洗礼者ヨハネのことと合わせて言えば、ヨハネが引き渡されるような決定的な時が来た、それは単なる悲しいニュースでもなく、不幸の始まりでもなく、「神の国」が近づいたことを示す、決定的な「時」の到来である。だから悔い改めて、福音を通して、主なる神様を信じなさい、イエス様はそう語り、活動を始めたということです。「神の国」という言葉は、「神の王国」あるいは「神の支配」とも訳せますが、それは場所や組織という固定的な概念ではなく、動きのある意味を持つ言葉です。言い換えれば、主なる神様が働かれる「時」が、今近づいている、だから悔い改めて福音を信じないとイエス様は宣べ伝え始めたのです。「福音を信じなさい」も直訳すれば、「福音にあつて信じなさい」となります。

マルコの物語は、この1章14節、15節だけでも、今、イエス様を信じてこの福音書を読んでいる人とは、主なる神様の働きが始まっており、その働きに自分たちが招かれて、言い方を変えれば巻き込まれて、それを読んでいることを示します。それは、イエス様の十字架と復活について、またその活動についてある程度の知識を持って読んでいたとしても、なんとなく信じ始めてほとんど初めて知るようなことばかりであったとしても、その効果は同じであったと思います。マルコ福音書が最初の福音書であるならば、イエス様の活動全体を、ことにその活動の始まりをまとめた形で知るのには、この部分を読んだ時が初めてであるからです。

ここから学ぶことはただ一つ、マルコ福音書を何回読んだとしても、また教会に関する教えについてどれだけ深く学んだとしても、この物語を読むとき、この物語は読者をあらためて主なる神様の業に招いていることを示すということです。それは、世界にどのような「悪いニュース」があつたとしても、それを打ち消す「良いニュース」が告知され続けるということです。そのような主なる神様の救いに関する「良いニュース」を告げ続ける教会でありたいと思います。